



問 「脂質異常症の漢方治療とは

どのようなものですか？」②

答 肥満と関係が深い「脂質異常症」の漢方治療について、お話を続けます。表は、前回と同様、日本東洋医学会が出版している「漢方医学テキスト」に記載されている「脂質異常症の頻用漢方薬」です。「大柴胡湯」「柴胡加龍骨牡蠣湯」「防風通聖散」「防己黃耆湯」「桂枝茯苓丸」「桃核承氣湯」は「肥満」「八味地黄丸」は「高血圧」、前回は「当帰芍薬散」についてお話ししました。

今回は「黄連解毒湯」について、お話しします。黄連解毒湯は、「外台秘要」という、漢方の医書で紹介されています。構成生薬は、黄連、黄芩、黄柏、山梔子の四味です。「ひどい便秘をして、うわ言をいつとまじは、承気湯が有効であるが、便秘をして

いないときには、黄連解毒湯が有効

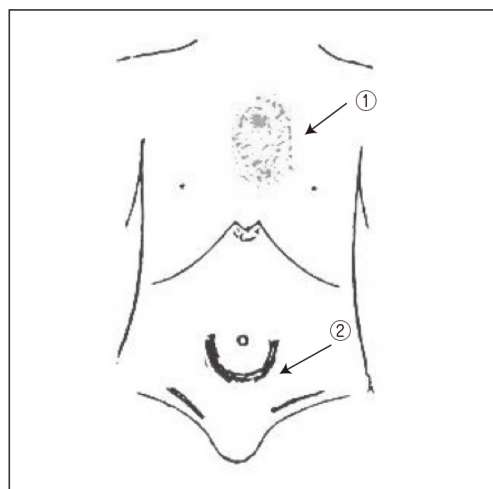
である」と記載されています。構成生薬は、いずれも、胸から上の熱を冷ます作用があります。黄連解毒湯は「からだの上の方にこもっている熱気を冷ますお薬」と考えられます。

当院では、この黄連解毒湯に、四物湯を加えた「温清飲」を投与しています。四物湯の構成生薬は、当帰、芍薬、川芎、地黄の四味です。四物湯は「からだの下の方の、血の流れ」や「水の流れ」をととのえる作用があります。図は、私の漢方の師匠が描かれた温清飲の腹証図です。①が「からだの上の方にこもった熱」を表わします。この熱を黄連解毒湯が冷まします。②が「からだの下の方の、血の流れ」や「水の流れ」が悪いことを表わ

します。これを四物湯がととのえます。温清飲は、黄連解毒湯と四物湯の合わせ技で、「上から下への流れをととのえるお薬」と考えられます。

脂質異常症の頻用処方

だいさいごとう 大柴胡湯	おうれんげどくとう 黄連解毒湯
さいこかりゅうこつほれいとう 柴胡加龍骨牡蠣湯	けいしぶくりょうがん 桂枝茯苓丸
ぼうふうつうしょうさん 防風通聖散	とうかくじょうきとう 桃核承氣湯
ぼういおうぎとう 防己黃耆湯	とうきしゃくやくさん 当帰芍薬散
さんおうしゃしんとう 三黄瀉心湯	はちみじおうがん 八味地黄丸



図：腹証図

(日本東洋医学会、「漢方医学テキスト」)